

# 馬獣医のよもやま話③⑤ 水口悠也獣医師

## 青草は疝痛を起こしやすい

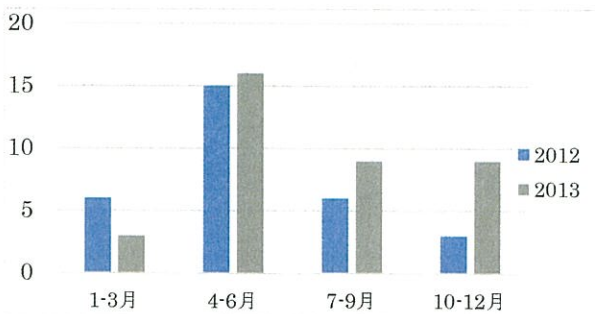


静内診療所 水口悠也

放牧地には青々とした草が生えそろう時期になりましたが、皆様の中にはこの時期に疝痛にかかる馬が多いと感じる方もおられるのではないのでしょうか。

そこで今回は青草と疝痛の関連性について、馬の消化管の特徴を踏まえながら簡単にお話したいと思います。

まず初めに下のグラフをご覧ください。



このグラフは過去2年間に疝痛を主訴として静内診療所に来診した馬の頭数(縦軸)とその時期(横軸)について示しています。青草が生え始める4-6月期にかけては疝痛の発生が増加する傾向にあることがグラフから読み取れます。

なぜ青草を食べると疝痛になりやすいのでしょうか？

このことを読み解くために、まずは馬の消化管の特徴からおさらいしてみます。

飼料は胃、十二指腸、空腸、回腸、盲腸、結腸、直腸へと順番に流れていきます。このうち前部消化管(胃、十二指腸、空腸、回腸)は消化酵素、後部

消化管(盲腸、結腸)は発酵による飼料の処理をそれぞれ担います。

次に、飼料の性質と消化管の関係についてみてみます。

草は繊維質を多く含むために消化効率が低く、主に後部消化管で緩やかに発酵されることでエネルギー源となります。この発酵過程にはガスの産生を伴います。一方、濃厚飼料は炭水化物などを多く含み、消化効率が高く、主に前部消化管で処理されることでエネルギー源となります。しかし、過剰に摂取すると、前部消化管で十分に処理されずに後部消化管に到達し、そこで発酵を受けることとなります。濃厚飼料は草に比べて容易に発酵され、大量のガスが産生されます。急激かつ大量に産生されたガスは時に疝痛を誘発します。

最後に、本題である青草の性質を考えてみます。

青草は繊維質も多く含みますが、炭水化物の含量が多いため消化効率が高く、容易に発酵されます。対して、乾草は繊維質が主体であり、消化効率が低く、発酵は緩やかに起こります。すなわち、同じ草でも、青草は濃厚飼料と似た性質も備えていると考えられます。さらに、この時期には日中放牧から夜間放牧や昼夜放牧に切り替える牧場さんも多く、放牧時間が延長することで青草を摂取する機会が増えます。本来であれば、少量の草を継続的に摂取する放牧下の馬では疝痛が起こりにくいと考えられていますが、放牧時間が急に延長し、青草の摂取量が急に増加することで疝痛が起こりやすくなるのではないかと考えられます。

疝痛は1年を通じて起こり得ます。よって、早期発見に向けて常に神経を尖らせることよりも、飼養管理による予防に重点を置くことが肝要であると考えています。一般的には、飼料を転換する際には旧飼料と新飼料を混合しながら1-2週間かけて行うことが推奨されています。したがって、夜間放牧や昼夜放牧に切り替える際にも、徐々に放牧時間を延長していくなどの工夫で疝痛の発生を予防できるかもしれません。